

# Café des open

## 三浦一族



### Menu 第3回

## 三浦一族ゆかりの地 大矢部

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

三浦一族は三浦半島を本拠としていましたが、なかでも大矢部周辺には現在もその旧所・旧跡が多く残されています。今回は、中央図書館郷土資料室が所蔵する江戸時代の絵図から、三浦一族の痕跡を辿ってみましょう。

この絵図は、江戸時代の文政8年（1825）に書き記されたもので、代々、大矢部村の名主をつとめた旧家に残されていた資料です。位置が分かるように、便宜的に寺院等の名称を地図に落としています。まず、中央右上の「円通寺」ですが、絵図には建物が記されているのみで、その名称まで記されていません。しかし、建物の側に「清雲寺兼帯」と記されていること、そのすぐ側に「深谷」の地名が記されていること等から、円通寺を指すものと考えられます。円通寺の開基は、三浦氏の祖と伝わる三浦為通で、一族が最も崇敬した寺院とされます。清雲寺の本尊である木造観音菩薩坐像（滝見観音）は、元々、円通寺の本尊だったとされ、江戸時代後期に清雲寺に移されたと伝わります。この頃には、円通寺は衰退しており、清雲寺の末寺となっていました。また、円通寺の背後には21のやぐらがあり、ここに伝三浦一党93基の墓とその最上部に為通・義継（為通の孫）の廟所等がありました。この絵図にも同所とみられる岩窟の存在が確認できま

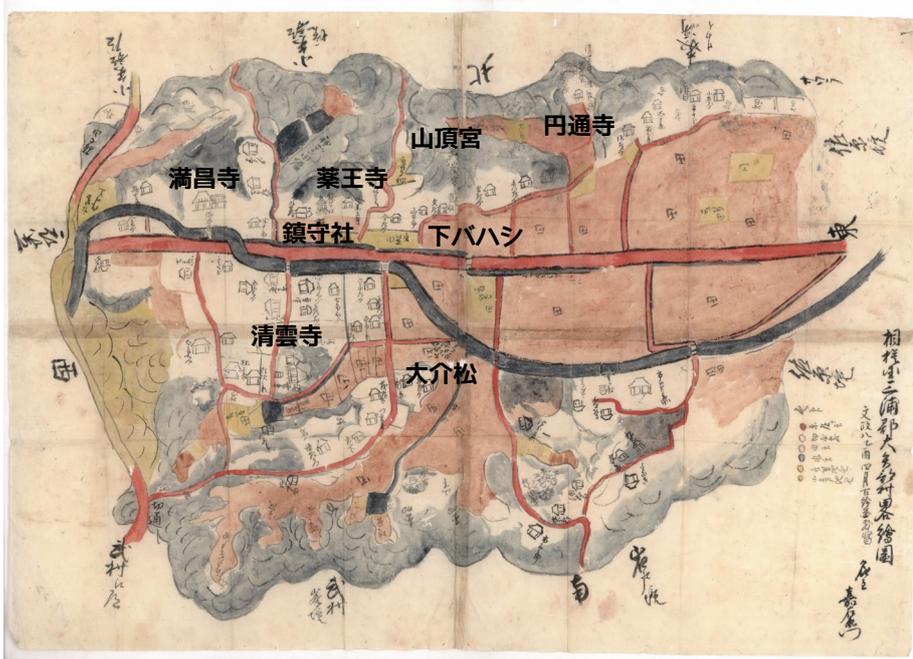
す。明治初年に円通寺が廃絶したのち、昭和14年（1939）、この一帯が海軍に収用された際、伝三浦一党93基の墓等は清雲寺に移されました。清雲寺は、三浦為継（為通の子）を開基とする寺院で、和田合戦の際、和田義盛の身替わりに敵の矢を受けとめたとされる木造毘沙門天立像（矢請けの毘沙門）が残されています。

「満昌寺」は、衣笠合戦で没した三浦義明の菩提を弔うため源頼朝が建立した寺院で、現在も鎌倉時代の造立とされる木造三浦義明坐像が祀られています。それ以外にも絵図には義明ゆかりの場所が記されており、「大介松」は、三浦大介の腹切松のことで、衣笠城を打って出た義明が最期を迎えたと言われる場所です。「山頂宮」は義明の愛馬を祀っていた社で、馬や牛が病になった際の病氣平癒の祈願や雨乞いの祈禱などが行われていましたが、大正初期に無くなり、現在その姿をみることはできません。

「薬王寺」は、和田義盛が、父杉本義宗及び叔父の三浦義澄の菩提を弔うために建立したと伝わる寺院ですが、明治9年（1876）に廃寺となり、現在はわずかに三浦義澄の墓等が残されるのみとなっています。現在、この旧跡の近くには、三浦義村を祀った近殿（ちかた）神社がありますが、この絵図では「鎮守社」とのみ

記されています。その他にも、江戸時代編纂の『新編相模国風土記稿』において、衣笠城があった頃の遺名として伝えられる下馬橋も、「下バハシ」として確認することができます。なお、同資料は、大矢部村に和田義盛の子で和田合戦でも活躍した朝比奈義秀（あさいなよしひで）の城跡の存在を伝えていますが、この絵図では、その名を確認することはできません。

今回ご紹介した絵図は、7月6日（水）から9月4日（日）までの期間、横須賀美術館で開催される「運慶 鎌倉幕府と三浦一族」展で展示されます。ぜひ会場でご覧ください。



相模国三浦郡大矢部村略絵図